

墓地

あなたは言つた
かうやつて手に受ける月の光が
しづくのやうに美しい と
やがて坂道にかかり
植込の垣が迫り その間から
四角な石の列が見えはじめ
墓場だとわかつたら
ぞつとしたやうに 身をふるはせて
立ちどまつて あなたは言つた
いつたい ここ どこでせう
ここ どこでせう どこ どこ
僕には それが 鳥の声のやうに
どす黒く聞えた
》あなたが 僕を愛してゐるならば
どこへでもついて来ればいい
死者たちに見守られ つめたい月の光の下で
あなたの肌をぼくに見せてくれてもいいのに
帰り道 月の光も黄色くよごれたやうに思へた
墓地からはあざける声がひびき
あなたが鬼ばばあに見えた